

吹田市総合計画審議会・第2部会（第2回）

開催日時 平成16年4月16日（金）午後7時00分～午後9時00分

開催場所 吹田市役所 中層棟4階 第3委員会室

議事内容 （1）前回会議での議論の要点

（2）第4章 施策の大綱について

出席者（委員）衛藤照夫 三輪信哉 宗田好史 木村 裕 寺尾恵子 筏 隆臣

蒲田雄輔 前田武男 矢野隆司 河井明子 阪口善次郎

永田昌範 西岡昌佐子

（欠席2名）

（事務局）富田企画部長 牲川企画部次長 池田総括参事 宝田参事

稲田主査 岡松係員

（傍聴人）なし

議事要旨

（1）前回会議での議論の要点

（事務局）

（資料-5について説明）

（2）第4章 施策の大綱について

（部会長）

今日は資料-5の前回の議論の要点に従い、「**5**環境を守り育てる魅力的で安全なまちづくり」と「**6**活力あふれにぎわいのあるまちづくり」の2つをどう書き変えていくかを中心に審議して頂きたいと思っている。この議論の要点の1「**2**市民自治が育む自立のまちづくり」についての取扱いと、4 主語を「市民」とすることについては、全体会で審議してもらう形にする。後の5～10に関しては、ここに書いてある通りということで、特に今日審議してもらう必要もないと思う。

要点の2の（1）全体についてだが、「**5**環境を守り育てる魅力的で安全なまちづくり」は、全体を2つに分けた方向で取り上げた方が良いというのが前回の大きな流れだったと思うが、これに関してはよろしいだろうか。分けるということは、素案の23ページから始まり、「（1）環境負荷の少ないまちづくり」「（2）自然と共生するまちづくり」「（3）循環を基調とするまちづくり」が「環境を守り育てるまちづくり」という事である。24ページの「（4）暮らしや都市活動を支える基盤づくり」「（5）良好な住宅・住環境づくり」「（6）安全なまちづくり」というのが「魅力的で安全なまちづくり」として独立していくという事である。それぞれ3つずつ書いてあるが、それ以外に勿論付け加える部分があれば付け加える方向にするという事で

ある。

議論の要点の2の(2)安全なまちづくりについてで整理してもらったが「安全なまちづくり」については今回資料も頂いているように重要な課題として、しっかり書いて行こうという事である。

(A委員)

4月16日の毎日新聞朝刊に「北大阪にバイオ都市」という大阪商工会議所と大阪府が構想を発表して、民間の募集をすると書いてあったが、こういうものが本当に吹田と周辺都市を含めて来るのであれば、どのように総合計画の中で位置付けるのか、吹田市あるいは吹田商工会議所の人達はどのようにこれを捉えているのかをここでははっきりする必要があるかどうか、僕は判断出来かねるが、前から気になっていた。この計画は吹田市の方で何か説明はあるのだろうか。

(事務局)

新聞に出てから情報を収集して、大阪商工会議所にも確認している。ある意味で吹田を飛び越しているようなこともある。

(部会長)

都市再生の絡みで、2～3年前に初めてバイオ都市構想というものがある。吹田市には阪大病院と循環器病センターという2つの大きな医療拠点があり、その周辺に研究所の集積もあり、「3健康で安心して暮せるまちづくり」というのは、非常に大きな柱になっており、今回のバイオの話はどうなるのかということだが、地域的には吹田にはかからない。むしろ比較的大阪の都心に近い吹田の方は医療、健康を中心に、その外側の方でバイオとか先端医療の部分をやってもらう位置づけである。

バイオは日本ではあまり話題にならないが、ヨーロッパ、EUの国では新たな公害発生源になるのではないかと恐れる動きがたくさんある。日本でも実は遺伝子操作の農産物に関してかなり厳しい規制をしている。それは環境のところだが、今操車場に関わる自動車公害の問題は市民意見としてたくさんでている。環境負荷が少ないとか言っているが、新たな公害に対する慎重な対応ができるように考えてもらい、操車場問題からバイオの問題もできる取組で良いのかと思う。

(事務局)

10年ほど前だが、バイオハザードの条例を作った。当時は文科省の指針にあったものを条例の中で義務化をして、場合によっては市職員の立ち入りが出来る権限を条例で初めて作った。

(B委員)

前回お願いした資料-1の件で若干確認をしたい。消防車の出動件数を手元で調べ

ると、平成11年度139件、平成12年度154件、平成13年度111件、平成14年度95件、平成15年度87件と吹田市の防災活動が徹底した関係で、消防車等による火災が減少傾向にあることは、吹田の今後について良い傾向を示してはいる。しかし、救急活動の実態を見ると、11,800件という平成11年度を比較しても平成15年度は14,135件になっている。平成11年から救急車がほとんど増加していない状況の中で、この様に件数が増大していく。議論の要点の2の(2)の「救急車、救急隊の不足は現実に大きな問題点になろうとしている。これをきちんと文章化する必要があると思う。」をもっと肉付けしないと、救急車も増やすことが出来ない。

(部会長)

「安心で安全なまちづくり」について、そういう事もきちんと市民に気を配るということとはとても良いことだと思う。高齢化も進んでおり、用心に越した事は無いことで良いことと思う。

(C委員)

吹田市に循環器病センターがあり、阪大があるという事でひとつの特色になるかと思う。吹田市の福祉の主体性として、こういうまちにするのだという事でマクドナルドハウスがあり、循環器病センターがあり、阪大があるという方向で考えなければ、結局本市の方向性というものは出ない。循環器病センターに出ていってもらいたくないからマクドナルドハウスを作るという目先の考え方ではなく、何らかの福祉の観点で「健康で安全なまちづくり」として本市の市民だけでなく、日本の中でその部分を担うのだという考え方も吹田市で要るのではないかとということで議論が途中になっている。そのような大局的な部分でどこか触れることもあるかと思う。

(D委員)

今日読売新聞に載っていたが、国立循環器病センターがモバイルのネットワークで救急車の中から循環器病センターのお医者さんとやり取りしながら、救急救命士が医師の指示に従っているんな事ができるという事をやるので、今日消防の方に訊いてみた。とりあえず、それを実装してやるような計画で進めているという話だった。ただし、治療のデータが個人情報になり、プライバシーの事があるのでこれをクリアしなければいけないという事である。地元の市にあるセンターなので、共に協力関係でやっていきたいと思う。

(部会長)

「安心で安全なまちづくり」のところをきちんと強化し、日本で一番「安心で安全なまちづくり」にする強い意思表示をこの中で書かせて頂きたいと思う。

(E 委員)

「安全・安心」を市民として望む声が強まってきている。その面から見ると、「非核平和都市宣言」とか「健康づくり都市宣言」のように、「安全・安心」は大前提として前に出すか違った形にすることがあると思う。各項目に「安全・安心」が絡んでいる訳である。市民に対して問題意識を喚起するということと同時に市民と一緒にそのようなことについて、まちづくりの中で心がけていく事がひとつの訴え方ではないかと思う。防犯とか防災は市民自治とかコミュニティと当然関係があるし、環境は環境で元々は安全・安心と一括りであったので関係はあるし、消費生活となると食生活と絡んでくるし、あらゆる所で「安全・安心」というのは多かれ少なかれ、絡んでくる。それぞれに「安全・安心」が根底にある事を加えていく。その大括りとして、一番冒頭にそういう問題を「非核都市宣言」とか「健康づくり都市宣言」のように、少し他の問題と違った形で扱うということである。

(部会長)

今の話を整理すると、全体に入る位置付けとして「安全・安心」を入れたらどうかということと言われたと思う。「**2**市民自治が育む自立のまちづくり」に「(1) 多様なコミュニティ活動の充実による住みよいまちづくり」にコミュニティが支えあうという、セーフティネットの話を入れてもいいかもしれない。「**3**健康で安心して暮せるまちづくり」ということで安心は入っている。「**4**個性がひかる学びと文化創造のまちづくり」は少しどうかと思う。**5**に関しては、環境の安全面という言葉が出てくる。それから「**5**魅力的で安全なまちづくり」の方では今の「(6) 安全なまちづくり」を**5**の(3)ではなく(1)の位置に持って来る。「**6**活力あふれにぎわいのあるまちづくり」の「(3) 消費生活を支える環境づくり」も食の安全ということに関わるので、「消費者の安全を守り」という文章もあるが、少し手を加えてもらうと今の意見はほぼ収容できるかと思われる。

議論の要点の2の(3)環境についてだが、「緑の増えるまちづくり」というようなテーマを入れられないかとの議論が出たので、「(2) 自然と共生するまちづくり」の中にもう一つ緑を書き込んで頂ければと思う。

田んぼの話とか農業公園の話とか出ていたが、実際江坂では菜の花の栽培をしている話も聞いているので、この話も「(2) 自然と共生するまちづくり」のところにに入れてもいいと思うし、あるいは今分けた「**5**魅力的で安全なまちづくり」の「(5) 良好な住宅・住環境づくり」へ組み替えてもいいかと思う。

(D 委員)

「公害」という文言だが、「工場・事業場での事業活動に伴う公害」とあるのは、原因がはっきりしている。そもそも公害はあるのだろうか。公害であれば、いわゆる「公」が後の面倒を見なければならない、自動車公害、いわゆる自動車の排ガスがあるが、「公害」ではないと思う。

(部会長)

受ける方が「公」であれば公害ではないか。自動車交通公害に対する規制は、まだ議論の余地がかなり残っているのではないか。

(C 委員)

昔は公害というものは、一つの企業が何かで特定できたが、今の「公害」は全て私達が自分で作り出しているものが「公害」になっている。車に乗ったり、クーラーつけたり、自分達がやっている。私達が「公害」を作っているという認識に立ち、それをどのように少なくするかという視点で今後20年いかなければ、話の筋が違ってくると思う。

(F 委員)

「公害」という用語を使うのかはともかく、非常に個人の責任が高まってきているのだということである。市民一人一人が無意識のうちに地球環境を悪化させているのは歴然としている。その辺のことに自覚的な市民になっていこうということはとても良いと思う。

(D 委員)

「公害」と書いたら、他人事みたいである。

(部会長)

基本構想素案の23ページの「環境負荷の少ない住みよいまちづくり」は市民が主体に考えるという点が足りないかなと思う。もう少し市民の自覚、自分たちも原因者だという自覚を持ち、したがって環境負荷の少ない住みよいまちづくりを市民一人一人が作っていくという論点である。これだと「行政が市民の健康が守られる住みよいまちづくりをめざします」で終わってしまうが、実はそうではなく、「市民みんなで環境負荷の少ない住みよいまちづくりをしましょう」というところに落ち着かないと、この表題は合わない。

(E 委員)

公害というのはもう過去の問題であり、今言われた地球温暖化とか、そのような問題が将来的にも京都議定書の問題にも含めてされている。環境白書でも「地域環境力」が出ていたが、市民が今までのように無計画に使えば良いのではなく、自分の生活は維持するが、その中で無駄なものは省いていく。ライフスタイルを変えるところからスタートしなければいけない。

もう一つは、自然との共生ということであれば、省エネとの兼合いもあるが、エコタウンを構築していくという意味や、吹田市としてのキャッチフレーズが何かを謳い文句に出してもらい、喚起をしていかないことには、抽象的にこのような一般的なこ

とを並べても、「一体何を目標にすればいいのか」ということになると思う。

(G 委員)

京都市の総合計画を頂いて、すらすらと読めた。吹田の場合は名神とかいろんな通過する車の公害がある。大気汚染もそれが大きな原因ではないかと思う。京都の場合はあまり大きな道路が市内を通ってないなと思う。その点で少し環境は京都に比べて良くないのではないかと思う。貨物駅の問題でだいぶ意見が市民から出ていたという事だが、あれは貨物のトラックが吹田を通過するのであって、吹田市民がそれを利用するのではない。京都の総合計画を見ながら、吹田市とは違うと思うことは、そのようなことかと思う。

(部会長)

吹田の場合は例えば市民が努力して環境負荷の少ないまちづくりをしても通過交通が減らない限り、その努力が報われないという構図がある。だからこそエコタウンということをして、自分の方を守るだけではなく、積極的に発信していく、社会を変えていくような運動の中核になっていく、社会をリードしていく取組が必要になると思う。

(G 委員)

外国ではトラックによる輸送よりも、今は鉄道の方を見なおしているようである。ただ日本で何故私の住んでいる吹田で、わざわざ鉄道の輸送を兼ねてトラックがここに止まるのかと思う。世界流れと逆行していると思う。

(部会長)

そのための J R でもある。近畿整備局管内では米原の方でも同じようにトラックから貨物に積み替えることをしている。それでも、まだまだトラックの方が98%ぐらい通っている。

(C 委員)

「中ではこれだけしているのに、何故外から来るのだ」というくらい頑張らないといけな。例えば四国の上勝町ではゼロ・ウェイスト宣言をしている。「自分の所からゴミを絶対に出さない、絶対にしない」という事を言っているからこそ、それならば他のものは来るなど言えると思う。

(部会長)

「自ら襟を正せ」といえばその通りだが、私も西淀川区で同じような活動をしており、西淀川区の皆さんに「自転車に乗り、車に乗るのはやめましょう」と言うが、彼らが幾ら努力をして自転車に乗っても国道 2 号とか阪神高速の交通量は減らないので、

辛いところはある。

ヨーロッパではスイスが南北の輸送貨物が国内を通過するが、トンネルがたくさんあって、排気ガスがあるので、高速道路を閉めてしまった。そうすれば相当困るので鉄道に切り替えることが進んだ。

(A 委員)

緑が豊かで自然環境を大切にすまちづくりは非常に大切だと思うが、結局メンテナンスがある。維持はもちろん、きちんと市がするのだと思うが、それも1歩進んで例えば緑のボランティアという形で、そのような地域の何かを作る。地域の防犯委員は防犯灯が切れている時に市役所に行っている。それとレベルは違うかもしれないが、何かそのような制度は現にあるのだろうか。

(事務局)

道路関係のアドプトロードという形で今2カ所あるが、地域の方が道路の緑の世話をしている。将来的には、例えば地域の公園を自らがメンテナンスする、そのような緑の関わりをどんどんやってもらう流れになってきている。

(部会長)

国土交通省とか色々な所で行われており、道路里親制度、アドプトとか道路オーナー制度とかの言い方をするが、それに登録すると必要な道具とかはすぐ貸してもらえる。

自然との共生のところに市民が自ら緑を育てるものが必要かもしれない。緑を守るのではなく、緑を育てましょうという取組が必要だと思う。農地の話も出てくるが、これも市民が農地を守る。勿論農家の方が中心になるが、農業公園的に農地を借りて食物を作ることから学ぶことが多いと思う。自然と共生するといったことは、まさにそういう事である。人間が緑を育てる農地を守るということで、ただ緑によって心の安らぎを得ていれば良いという問題ではない。

(G 委員)

吹田も農業公園とは言わないが、市民農園はあちこちで行っている。外国では、オランダとかドイツとかで、国が制度を作り、農業公園として必ずそこには野菜と花と木を植えましょうとかいうのがある。イタリアでは1/4の野菜が農業公園から出てきているようである。農業公園をたくさん作ることが出来れば、環境もとても緑が多くなるのではないと思う。農業公園で作った野菜を、私達が食べられるようになれば吹田の中で循環するし、良いと思う。

(部会長)

良い話だと思うが、吹田の農地は本当に少ない。その限られた農地をどのように皆

様で有効利用していけるかどうかである。

(事務局)

先ほどの公害の話について、後でまとめる際に参考にしていきたいが、地域環境力の話が昨年の環境白書で初めて出され、そこには一人一人が地球負荷への原因者であるという考え方が全体にあったと思う。

(部会長)

そういうことも踏まえて、修正していただきたい。

第2次の総合計画で「生産緑地を保全し」と具体的に書かれていたが、今回の総合計画では環境保全、生産緑地の農地に触れることで意見を採用したいと思う。

(H委員)

吹田に自転車の道路を整備できないものかと思う。どのくらい公害に役に立つのかわからないが、買物でも車で行っている人がとても多い。その辺の道路が整備できればみんな自転車で行けるのではと思う。

(F委員)

「自転車のまちづくり」のための総合計画のようなものはあるか。

(事務局)

どちらかというと、「自転車のまちづくり」という視点がなく、バリアフリーの以前の時代から、「歩行者の安全のために」という事で撤去と保管をする、あるいは駐輪場を作るという事業方式で行っていた。

(F委員)

吹田は高低差があり、確かに問題はあるが、アクセスがきっちりすれば、自転車に切り替えられるはずである。

(事務局)

試験的に今年からレンタルサイクル制度を始め、山田駅と江坂駅で、実験的に貸し出し自転車をするにより、台数を減らしましょうという実験を行う。

(F委員)

将来的なエネルギーの問題を考え、自転車との関わりや歩くこと、それが今後10年、20年でクリアになる。そのような意味で将来的に交通体系の見直しを図ることにリンクをはっているのが良いと思う。例えば安全な駐輪場とか、そこへ対するアクセスとか、総合的に見なおす計画視点もいくつか考える必要があると思う。

前にも言ったが緑を植えると切らなければならない。年間13万トンのゴミが焼却工場の中で燃やされている中で、4千トンが剪定枝で、大体3～4%ぐらいだが、これが持ち込まれると一塊りになり、ものすごい勢いで燃えるので、なかなかコントロールは難しい。できるならチップ化して、それを土地に播くのが一番良い。その辺もきっちりしなければならないと思う。ドイツでも都市部の中の公園では、落ちてきた枝を全部切り取ってその場でチップにして全部木の下に敷いているため、歩くのにやさしいし、且つ下草が全部それで抑えられている。さらに、管理やメンテナンスに手がかかっていない。ただし、チップ化は音とにおいがあり、住民の苦情は著しいということがある。

(部会長)

まさに循環を基調とするまちづくりの中に位置づけても良い事である。

京都市は自転車総合計画を持っており、7割は自転車駐輪問題である。調べたが、場所によって特性が違う。通勤客とかは都心にずっと止めてしまう。同じ1㎡でも20台以上の自転車が行き来して駐輪されるスペースと、たった1台の自転車が朝から晩まで占有している場合がある。

「魅力的で安全なまちづくり」の所に、街並み・景観、歴史的環境のことを私が書きこめばどうかという意見を言ったが、どうだろうか。

(E 委員)

自転車は車道を走るのか歩道を走るのか、何か吹田としてきちんとしたものができれば画期的だと思う。オランダは国中自転車専用道路が走っている。交通機関にも自転車を持って乗れるという事である。その辺で吹田がエコタウンという形で、何か旗揚げしてリードできれば、ものすごく画期的だと思う。

景観の問題は是非電線を全部地下化にしてほしい。道路も広くなるし、景観も良くなる。お金のかかる話だが、このような長期構想の中で出来ない問題かもしれないが、是非盛り込んでもらいたい。

(部会長)

景観という項目も都市計画づくりの項目に1つ入れる。

景観法も国会で審議されつつあり、景観法の中で一番よく書いてあるのが、電柱の地中化である。関西電力の負担ではなく、国庫負担で地方自治体も負担はするが、95%は公費でやるので進む。

(I 委員)

吹田の場合はJR以南のまちづくり協会がある辺は古い街並みがある。協会の活動の中で、清掃ボランティアがまちづくりセンターの庭を綺麗にするため毎日来て、朝落ち葉を掃いている。問題として緑を大切にする心がここで書き込まれていれば、実

感があると思う。緑のネットワークというのもあるが、例えばこのセンターを基点にして、ネットワーク化を図り、モデルコース等を作る。実際は緑がなくて屋敷が見えているだけだが、それでもそのような事が非常に大きく作用し、良い雰囲気が出ると思う。

(部会長)

緑に関しては環境の方にも入れるが、街並み景観、歴史的環境の方にも緑を合わせて入れることにする。

(F 委員)

街並み景観、歴史的環境というとモニュメントとか歴史的建造物が含まれ、それに対する規制法があると思うが、全体が見苦しくなくなるのは電線の話だけではなく、広告塔もあると思う。全体的に方向付けをして、良い街にしていく必要があると思う。緑の全体が醸し出す雰囲気の良さをどのように守れば良いのだろうか。

(部会長)

「緑のマスタープラン」という制度があったが、それがそのような視点に立ち、多様な緑を体系的に位置付けて開発時など生け垣の助成から始まって、密集地区の整備という取組があった。

(C 委員)

緑で一番圧倒的にボリュームを感じるのは縦の面である。吹田の場合は段状になっており丘であるから、縦の面が非常に多いと思う。そうすれば、縦の面をどう上手く作って残していくのか。私の家の場合、万博公園の縦の面にいっぱいマンションが建つことにより、縦の面が減ってきている。名神も縦の面がずっとあって悪い。視野に入ってくるのは、平地より縦の面が多いことを意識し、特に吹田ではそのようなことを体系化したら面白いと思う。

(部会長)

壁面緑化というのがあり、今道路公団が一生懸命やっている。それで全部名神は覆われ、随分視覚的に違う。屋上緑化は大阪府が随分と取り組んでいる。緑の街並みの項目を作るという形で整理して頂きたいと思う。

(J 委員)

特に環境の問題については「教育」に絡めてもらえないかと思う。教育の中で入れて、みんなで勉強しようという場を何とか入れることはできないだろうか。そうしていかなければ、ここで解っている人だけの基本構想ができて、どれくらいの市民が中身を理解して読んで頂けるのか。理解をして、そのことで行動して、生活の中で生

かしていく為にはどうしたら良いかを知恵を絞ってもらわないといけないと思う。

(部会長)

「**4**個性がひかる学びと文化創造のまちづくり」というのがあり、ここでは「豊かな心」、「生涯学習」、「スポーツ」、「文化」となれば、ここで「環境」を挙げても良いと思う。**4**は第1部会で議論してもらうが、少し提起しておこうか。

(J 委員)

それと先ほどの自転車のことだが、吹田は駅が14ほどあり、その駅に近い集合住宅やマンションの駐輪場などはあふれている。団地の中は道路交通法に違反しないので、駐車違反にならないところへ止めてしまう。駐輪場の整備とか、いっそのこと目的に近い所まで自転車で行けるようにすればどうか。

(部会長)

登録しているものだけで、京都市では現在33万台の自転車がある。放置自転車は2万5千台撤去するうちの約6千台が取りに来ないそうである。6千台は撤去されるが、京都市内では年間1万2千台の自転車が購入され、新たに登録される。だから、どんどん増えていく傾向にあり、年間4～5千台増えている。吹田市がどれくらい増えているか知らないが、誰かが撤去や捨てない限り至る所に自転車がある。

真剣に考えなければいけないが、税金で駐輪場を作るのは良いが、果たして税金でやるべきものなのか。あれほどコストパフォーマンスの悪い土地利用も無く、もう少し合理的に考えても良いのではないか。

(C 委員)

駅に駐輪場を置く所もあるが、逆にマンションでもレンタサイクルをしている所がある。マンションのものなので、ぞんざいには扱わないし、変なところへ置かないし、無くしたら自分だけの問題ではなくなる。逆転の発想でマンションにレンタサイクルを置くと駅に集中しないと思う。

(部会長)

自分の自転車でなく、みんなが使う自転車ということで、レンタルサイクルもそうだが、そのような方法を皆さんかなり考案し、全国の自治体で色々行っている。吹田市のレンタルサイクルもそうだと思う。

「**6**活力あふれにぎわいのあるまちづくり」の審議をお願いする。コミュニティビジネスに関して、商業あるいは農業の問題も吹田がどうしていくかという事である。素案の26ページ「(1)地域の特性を生かした産業の振興」の中身をもっと密にするという意味である。

吹田市の平成14年6月21日に出ている「吹田市商工業の新たな振興策」がある。こ

の中の「市民生活を支える地域密着型商業の展開」の所に地域完結型のコミュニティビジネスがある。「魅力ある商業地づくり」の所にＳＯＨＯ、空き店舗対策とか、外部発信形のコミュニティビジネスの記述があると思う。この２つと産学連携の話が実は「（１）地域の特性を生かした産業振興」の中にストンと入ってくると、この内容が密になると思う。

吹田の場合は商業地域でいうと、江坂周辺はもちろん業務中心の地域だが、レストラン、飲食、ファッション等のサービス業がある。ＪＲ吹田駅界隈にも商業施設・商店街がある。何ヶ所かニュータウンの中にも商店街がある。この街全体の商業サービスをどうするかということがある。こういうところの小さな商業地は、大型店が出来るとか、当然衰退する所にあるので、地域の生活者を支えるような商業・業務の話もあれば、都心型の梅田とかミナミに匹敵するような可能性を持っている新しい若者の街をどのように伸ばしていくかがある。そのままにすると吹田からどんどん賑わいは遠くなってしまい、淀川の南に行かないと都心が無くなってしまうことになる。その辺でどう考えるかという事も勿論一つの選択肢である。

（Ｃ委員）

大阪府で今一番力を入れているのがコミュニティビジネスと言われているが、なかなか大変と聞いている。介護関係のコミュニティビジネスが一番力を付けている。やはり介護保険という仕組みがあるので、そのようなところに波及したと思う。そうすれば、コミュニティビジネスといっても、それなりの仕組みを作らなければいけないと思う。吹田の中でそのような方向性をきちんと作り、政策をしていけば、介護保険のように何かインセンティブが作られると思う。これからどのような方向かを、本気で考えなければ吹田市のポテンシャルはどんどん下がるのではないかと思う。その部分が思いつかないかと思う。

産学連携ということだが、産業に結びつくものとして、大学にどのような具体的なことがあるのかわからないのだが。

（部会長）

私は京都府立大学の地域学術調査研究センターのセンター長である。商工会議所は地域学術調査研究センターと定期的に交流している。関心ある人が100人ぐらい来てもらい、「うちこれを研究しています」という事をセールスする。研究のわかりやすいパンフレットを作って配っている。実際シーズとニーズがマッチしてビジネスになるのは少ない。リエゾンオフィスや産学連携コーディネーターをやっているが、なかなかマッチングしない。吹田の場合は、元々製造業が少ないから、産学連携はシーズとニーズがマッチすることが無いと思う。吹田の産業でいえば、コミュニティビジネスを含むような商業、流通、サービス業、あるいは文化的産業がどのように大学とマッチングするかを考えていけないといけませんが、そのようなソフト系に関することは、大学は比較的シーズの提供に関してあまり熱心ではない。文化がどう産業になってい

るかという事を知らない。

(C 委員)

大学と連携することで、新しいものがうまれるように書いても、実態としてどうかという事がわからないのなら、ただ書いてはいけないと思う。

(部会長)

そのような交流を大学とやっているのか。

(事務局)

「大学があるまちづくり」ということで、各大学とどういうことが「まちづくり」でできるかという事を2年かけてやった。どうしてもすぐに出てくるのが産学連携である。まちづくりにどのように大学の知恵を出してもらえるかという、かなり難しい。大学のプロフェッサーとの間の研究委託はあるが、大学の組織としての関わりがどうしても見えてこなかった。

関西大学の先生と学生のジョイントでルネサンス事業がある。まちおこしのために文化と商業が連携しなければならないという考え方のもとにやり、ついこの間チャレンジショップが学生との間で連携ができた。

(部会長)

立命館大学と龍谷大学が草津市にキャンパスを持っている。草津市はその連携を熱心に行うため、市の職員はそれぞれの大学に1人ずつ出向し、オフィスをもっており、大学がまちづくりを含め、色々な事業の支援をしてもらえるかということをしている。もう一つは、学生の面倒をどう見るかということで、不動産屋との調整を行ったり、アルバイト先を斡旋したりとか、非常に可能性はある。

(E 委員)

去年の10月の日経産業新聞に、大阪大学と茨木市が北大阪活性化協議会ということで、中小企業と大阪大学とが新規事業を創出する支援制度を設けて動き出している。大学も最近ジョイントベンチャー、ベンチャービジネスに対して積極的に考えている。市や企業が積極的にアプローチすれば、学校側としては姿勢は変わってきている。

学生数は吹田は多いと申し上げたが、学生にSOHOとかを整備することがある。江坂地区でもずいぶんスペースが空いてきている。マンションでもそうだが、既成の用途だけに限らず、建物のコンバージョンが近々の問題になっている。コンバージョンの中で、SOHOに設備を提供、助成するなどして学生を引き止め、学生が新しいビジネスを創出することを積極的にバックアップする制度を市として示してもらえたら、彼らは敏感に反応してくると思う。そういうことを構想に盛り込んでもらえればと思う。

毎日新聞で「全国4,600の」R駅前商店街は多くの地域でシャッター街と化している、そうした地方都市の再生のためにまちづくり交付金制度が設けられた」という記事があり、国としては真剣に取り組みつづけるわけだから、これをうまく利用することにより、再生を図ることができる。それをいかに吹田市としてキャッチアップするか、市民なり企業と協働し活性化していく機会ではないかと思う。

(事務局)

先ほど言われた茨木市と大阪大学のことについて説明すると、三島地域にそのような支援システムがあり、商工会議所を中心に茨木市だけでなく各市が入り、大阪大学、関西大学を中心に相互支援をマネジメントまで含めて行っている。それから産学連携だけでなく、ベンチャービジネスに対し、関西大学の先端科学技術推進機構とジョイントができており、情報交換のできるシステムができあがっている。

(部会長)

「**6**活力あふれにぎわいのあるまちづくり」の「(1)地域の特性を生かした産業の振興」のところに、もう少し本当の地域の特性とは何かと分かるような根本を立てたい。一つは大学とのこと、もう一つはコミュニティビジネスである。なぜコミュニティビジネスかという、例えば雇用対策とか産業支援、地域おこし、コミュニティへの振興という色々な理由がある。おそらく吹田市はコミュニティビジネスをおこす能力を持った市民が非常に多いところであると思う。子育てが終わった方、リタイアされたサラリーマンの方等が集中的に多いので、そのような方が何も介護だけでなく、いろいろな可能性を追求していくと、ここは東大阪市のような工業地帯とは違って、そのような人たちがいろいろなビジネスを興したコミュニティビジネスが集積する、そのような町なのかもしれない。かつてはベッドタウンといわれ、みんなが大阪の都心へ働きに行ったが、今度は吹田で新しいビジネスの中心が生まれるかもしれないという脱ベッドタウンの転換点なのかもしれないという特性がある。よく大阪大都市圏はリング状になっていると言われており、ここはみごとなホワイトカラーベルトである。

(F委員)

2年がかりでコンソーシアムを行ったということだが、いつ頃どのような形で行ったのだろうか。

(事務局)

コンソーシアムを目指しているわけではないが、京都のような形ではかなり経費がかかるので、まずは外郭研究機関とのまちづくり協議会をつくりたいという思いがあり、それに後からバイオの研究所が入ってもらうことにより、科学のまちにならないかということで、一応今年度にはそのようなテーブルが可能になる予定である。

(F 委員)

「大学のあるまち吹田」と言われているが、大学が何をやっているのか、実際に何かやったかが疑問であった。それなりの力をかけてやってこられたのか、これからやろうとしているのか。

(事務局)

平成 9 年に作られた文化振興ビジョンの中に「大学のあるまちづくり」と入れている。ところが実際に大学との協働がなされてきたかという、なされてこなかったと思われる。2 年前から独立行政法人化になるというのもある意味チャンスなので、まちづくりへの参画という問題提起をさせてもらった。大阪大学は地域に開かれた大学ということで、特にビジネスの地域化ということ、もしくは大学とのビジネスを考えているので、その意味でのジョイントができないか、あるいは学生を借りることはできないか、ということで結果、基本的な方策を 2 年間かけて議論したが、大学副学長に出てもらった会議であり、かなり一般的な論議になった。後は、具体的に教授や実務家、実務研究者のレベルにおきたいという意味で協議会を設定し、今年度はそのようなテーブルで開かれる予定である。

(F 委員)

大学の研究者は今独立行政法人化があるので、どこも死活問題で、その意味でいかに生き残るかを考えている。その意味で、かなり吹田が考えることに近づいてきていると思われる。研究者というのは本来、自分が研究できればいいと考えがあり、大学と産学連携をすると良い事があるだろうというのは、少し幻想であると思われる。むしろ、活力あふれる賑わいの中に、もっと学生が出てこないかと思う。吹田市の教育委員会が大学に良い手を差し伸べて、学生のボランティア活動で単位を取る事ができるということをした。吹田市は大学のまちでありながら、学生が匂ってこない。ここは、学生が通過交通になっている。なんとか学生が引き出せるようなプログラムもひとつの手だと思われる。たとえば介護の中で、あるいは教育の中で、学校の草むしりや家具の修復でも良いと思われる。どんどんやりたいという生徒がいる。もう少し学生たちを促すようなものがあるとよい。

(部会長)

京都の大学コンソーシアムの委員をしている経験から言うと、大学教員はだめで、学生が非常に力になることと、大学には事務職員の方がおられる。大学コンソーシアムがこれだけがんばっているのは、立命館大学の事務局長の手腕である。京都市は大学が流出したので、それに対抗するために作った戦略が、大学コンソーシアムである。キャンパスプラザを駅前に作った。市内の学生はわざわざ駅前のキャンパスプラザに来ないが、外にいる学生が近鉄、JR を使って来て、キャンパスプラザを拠点にし、待ち合わせをして、まちに繰り出すかバイトに行く。

京都市の経営の視点に立つと、学校法人は、国立大学も同じですが固定資産税を払わない。だから、広大な敷地を持っていてもあまり歓迎していない。しかし、消費者としての学生と優秀な労働力としてアルバイトの学生もほしい。したがって、キャンパスはいらない、学生は欲しいという戦略がキャンパスプラザである。実にこれは成功しており、飲屋街は学生であふれており、京都の三条通りなどで活性化している町屋再生店舗等は、9割以上が学生のアルバイトである。その町屋の個性を上手にお客に伝え、個性的なサービスを提供できるというのが、実に質の高い学生である。ボランティアでもいいし、アルバイトでもいいので、学生とのコネクションという、吹田市の特性を活かすのが良い。通過しているだけではだめで、たまり場をどのように作るかということである。

(C委員)

吹田は大学とホワイトカラーの住居地ということで、今大学では梅田駅前に多くのサテライトを作りそこで勉強した人が企業に行くということだが、逆に地域を考えればホワイトカラーがそれだけいるから、吹田の中にサテライトを作り、実学的なものをすれば、会社帰りにどこかたまり場ができないか。つまり、学生だけではなく、ホワイトカラーのものが出来ないか。

これだけ大学があるので外国の方が非常に多く、日本とポテンシャルが違うので、若い学生にとっても魅力的な訳である。そして留学生は虚学でなく実学で、即自分の国に役立てなければいけないため、ビジネスに繋がっていく。そのような意味での留学生との関係を綺麗事ではなく、政策で吹田市の中に取り込み、帰国後に吹田市の学生等と繋がらないか。経済のグローバル化にそれはそれで繋がってくるので、それが学校と地域とホワイトカラーと大学とを考え、いろいろなコンセプトで具体化が出来るはず。絵に描いた産学合同ではなく、具体的な戦略を一つの流れの中で出来れば良いと思う。

(部会長)

ここは立地がいいから、街中でサテライトを作り社会人の方に勉強してもらうこともいいが、そもそも大学に行きたいのではないか。もっと積極的に吹田市民向けの講座を開いてもらい、大学では社会人向けや夜間のコースを持っているから、こういうゼミを開いているという情報を流せば、行きたい市民はたくさんいると思う。

(C委員)

せっかく商品を持っているから、どんどん見せれば良いと思う。

(部会長)

全体的に「**6**活力あふれにぎわいのあるまちづくり」は皆さん夢を持っていると思うが、あまり書きこまれてない。若い学生をどう取込んで一緒にまちを作っていくと

か、高齢化社会を迎える時に高齢の方に福祉を提供するのではなく、生き甲斐や面白い仕事をして頂くことが実は充実した高齢化社会になるわけである。コミュニティビジネスはそのような意味で大きな可能性を持っている。その方達の為にも活力あふれにぎわいのあるまちを作っていくことが大きな課題になるので、もう少し書き込むことにしよう。リタイアしたサラリーマンが増えるこのまちで、どのように特化しビジネスにするか等、この部分が次の10年間には大きな課題になってくる事は確かである。

(L 委員)

古い物を残すという意味で、匠の知恵の伝承というものが構想に入らないかと思う。吹田では小さいながらも家内工業的なものの知恵があるように思う。それを伝承していくことも入れてもらいたいと思う。

(部会長)

市民まちづくり塾を吹田市でやり、紙ヒコーキの世界チャンピオンやバイオリンマイスター、京都の伝統産業に何かを納めている職人さん、伊勢神宮に何かを納めた職人さんが結構おられた。

今のご意見等、「吹田市商工業の新たな振興策」等を参考にして、次回までに⁶の(1)に関して、少し論点を整理し、2つか3つの項目にしても良いかと思う。つまり学生のことであるとか、コミュニティビジネスについて、とても重要だと思われるので、次回進めたいと思う。

今日の部会はこれで終了する。

以 上